

インドネシアの島国の中のバリ。赤道直下に位置し、リゾートの場所として知られている。リゾートの地に訪れるのは今回が初めてであったが、そこには癒しとくつろぎ、そして日常の時間感覚を良い意味でずらし、奪ってくれる時の流れがあった。

訪れた場所は山に位置するウブド、海側に隣接しているスミニャックである。共通することは入口であるエントランスがとても広く、開放感ある高い天井でつくられていた。ウエルカムドリンクと笑顔でのお出迎えがあり、ウブドではさらに足元に道しるべとなる花びらが点在し、フラワーリングを首にかけられ、「ようこそカマンダル・リゾート&スパへ。(ホテルの名前)」と言われたような心からのもてなしが感じられた。

カマンダル・リゾート&スパではコテージのようにかやぶき屋根の各宿泊室が雁行状に配置され、路地を通るような感覚で、宿泊客をいざないの場所に導くように植栽や雁行によってうまれるアイストップなどにより、高揚感を演出しているように思えた。また、中心部には大きなプールと力強い木々たちがあり、食事をする空間からの借景や、プールサイドからの眺めが時間の流れを止め思考の安らぎを与えてくれた。また、宿泊部屋でも寝室以外に高台になっている外部空間では180度一面に広がる緑が目飛び込み、体を自然に包み込まれたような感覚を味わえた。

スミニャックのザ・ソフィテル・スミニャック・バリホスミニャックのザ・ソフィテル・スミニャック・バリホテルでは食事をする場所と散策できる広い庭園が隣接しており、その中間部分のテラスでの食事は自然に囲まれすがすがしい朝を迎えることができた。また、庭園内を散策しているとあう従業員全ての人が笑顔で挨拶をしてくれ、ここに働く人の良さが感じ取れた。どちらのホテルにも共用のプールがついており、海を隣接しているスミニャックは開放感があり活動的な空間で、対する、ウブドでは森の中にたたずむ水辺を思わせる癒しの空間に感じた。

街と宿泊施設とはかなり違う印象があり、街は少し薄曇っているように思えた。

散策中にタクシードライバーに「タクシー乗りませんか？」と散々聞かされたせいもあってか、従業員の印象の良さが際立っていた。

リゾート地とは日常生活を忘れさせ、自分を取り巻く未知の空間がなせるものなのかなあと思う。人は初めての物に触れた時や、食した時、又空間に訪れた時など未体験のことは何らかの刺激が体内に感じ取れる。それは癒しかもしれないし、感激や刺激的なことかもしれない。何事も創造することは、必ずそこから誰かしらそれに触れ・体感することでその人の感受性に触れるであろう。建築を考える上で、第三者を考えることは至極当たり前のことだが、改めて何か考えさせられる研修旅行であった。

